

伸子とマーサ・クエスト

—母親・夫との葛藤を通しての自分探し—

榎 本 義 子

宮本百合子(1899—1951)の『伸子』(1924—1926『改造』連載)、『二つの庭』(1947『展望』連載)、『道標』(1947—1950『展望』連載)とドリス・レスリング(Doris Lessing 1919—)の五部作からなる『暴力の子供たち』(*Children of Violence* 1952—1969)は、それぞれ伸子、マーサ・クエストという、因襲にとらわれず主体的に生きたいと願う女性を主人公とする、自伝的色彩の強い連作である。主人公の性格や生き方は、その名前によって表わされている。伸子は、どこまでも伸び続けたい、よりよく生きたいという自己成長願望の強い女性である。また、マーサは、クエスト(探求)という名字が示すように、一生涯手探りで自分の生きる道を探し求めていく。

このシリーズの中で、『伸子』と『暴力の子供たち』の最初の二作品『マーサ・クエスト』(*Martha Quest* 1952)と『ちゃんとした結婚』(*A proper Marriage* 1954)は、青春期にある女主人公の成熟した女性への精神的成長過程を描きたいいわゆる「教養小説」^{ビレドゥングスroman}と言えるだろう⁽¹⁾。彼女たちは共に親許を離れ、世の中に出て、異性を知り、結婚するが、やがて離婚に至る。『伸子』の舞台は大正期の日本であり、『マーサ・クエスト』『ちゃんとした結婚』の舞台は第二次世界大戦前後のイギリスの植民地南アフリカと、作品の背景は大きく異なるが、既存の価値観に反発し、自己

確立の道を模索する二人の主人公には、多くの共通点が見られる。

これらの作品において、彼女たちがアイデンティティを模索する過程で、特に母親と夫が重要な位置を占めているように思われる。伸子もマーサも、母親とは異なった人格形成をしたいと願い、結婚するが、夫との結婚生活にも失望し、離婚によって新しい出発をはかろうとする。彼女たちは、母親や夫との愛憎の葛藤を通して、主体的な生き方を追求しようとするのである。

伸子、マーサにとって、母親の存在は大きい。伸子の母、佐々多計代もマーサの母、メイ・クエストも、共に妻、母という役割にのみ生きてきて、女として、人間としての欲求が満たされていない。彼女たちは、満たされない思いを娘への期待や干渉という形で解消しようとする。多計代もメイも、時代や社会の犠牲者と言えるだろうが、娘の目から見れば、自己認識に欠け、自分たちを束縛し、抑圧してきた定型化した価値観を批判することを知らず、むしろ娘たちにそうした価値観を押しつけようとする。こうした母親は、主人公にとって、ある意味で彼女たちが挑戦する価値大系を表わす象徴的な存在であると言えよう。

伸子の母は、自我の強い、激しい、エネルギー豊かな女性である。資産家佐々の妻として物質的には豊かな生活をし、長女の伸子をはじめ子供たちにも恵まれている。だが、時代の制約の中でエネルギーを注ぐ適切な場を持つことができない。「強い生命力をもちながら、時代の境遇によって夫人、母という立場から動けない」多計代の満されな⁽²⁾い思いは、『伸子』の続編『二つの庭』の中に描かれている。彼女は自分の実現できない夢を娘に託そうとする。伸子が「母様は、ある点で御自分の生活ではできなかったことを、私にさせたいと思っていらっしゃるのよ、ね？」⁽³⁾と言うように、娘が作家として成功することに期待をかけている。

しかし、伸子にはこうした期待は重荷に感じられ、母の許を離れ、自分の手で自分の欲しいものを掴もうとしてニューヨークへ来たのである。十九歳の伸子のアメリカ遊学の動機は次のように述べられている。

父について紐育^{ニューヨーク}へ来たのも、彼女は自分が欲する通りに生きて見る機会を得たいのが主な動機であった。佐々の家で伸子は長女であった。勝気な母の多計代のひそかな待望の偶像にされそうなところがあつたり、中流家庭の娘として、伸子が望むだけどしどし人生に突入することを許さない掣肘^{せいちゆう}があつた。このままでは、自分が半分も生きるだけ生きていない。生活が未だ始まっていないという意識が、少くとも過去三年彼女を苦しめつづけて来ていた。……伸子にとっては、親の家を離れて生活できるというだけでも大したことなのであつた。(27—28)

アメリカの大都市は、母や「中流家庭」の価値観の束縛から解放され、伸子が自由に自分の責任で自己を發展させる場となる。

多計代は、娘を従来の女の役割で束縛することなく、作家として立つことを勧めるが、娘の結婚に関してはきわめて保守的であり、家の格とか体面を重視する。伸子とアメリカで知り合った三十五歳の古代語を研究する苦学生、佃一郎との「身分ちがい」の結婚は、多計代の気に入るはずがない。会う以前から彼女が佃に疑惑を持つのは、彼が「貧しく、社会的背景を持たないため」(76)である。多計代は、佃が伸子と結婚したのも「相当な親がついているから、どちらに転んでも損はない」(75)と思つてのことであると推測し、また、佃の親から挨拶のないことを気にかける。

伸子が十六歳も年上の貧乏学生にひかれ、彼との恋愛を貫き、自分のほうから結婚を申し込むという積極的な態度に出るのは、こうした従来の結婚観に対する反発からである。彼女は結婚する以前から両親の驚きや憤りを予測し、「自分は後に引くまい」(51)と心に決める。家を重視する母親とは異なる自分の結婚観を、伸子は次のように多計代に語る。

「——普通、娘さんはお嫁に行つて落着いて、良人と同化して、最も現在の社会に安定な生活を得ようとするのが目的でしょう？　だから同じ階級、同じ伝統をもつた家、または少しか或いは沢山、運命が許すだけ成り上ること

を条件とする——違うというのはここなの……私は自分が育ったようにして育ち、自分が見てきたようなものばかり見てきた、その親達も母親達とそっくりだというような男には、ちっとも興味を感じない。それどころか不安よ。だから私が牽きつけられるときは、いつでもきつとその点だけでも何か違ったところがあるものだという事になってしまふの」(79)

家に固執する多計代は、佃を養子という形で佐々の家に同化させようとする。物質的にも社会的にも「勃興時代」にある、「精力的で、排他的で、あまり智的でない原始生命が充実してい」(95)る佐々の家では、家族の者と気軽に交わろうとしない佃は、浮いた存在の「異分子」となり、家庭の雰囲気の代表のような多計代の神経にさわってならない。彼女は、「異分子」のまままで続ける佃を、「伸子ぐるみ、一層すっかり自分の手の下に結びつけてしまおう」(101)として、彼を佐々家の養子にしようと言います。二人は純粹に愛のために結婚したと思いたい伸子は、養子の話をきっぱり断ろうとしない佃に失望を感じ、孤独感を覚える。養子の話を受け入れることは、佃が彼女を利用するために結婚したという多計代の憶測を承認することになってしまふからである。

結局、戸籍の事情で佃は佐々家の養子になれないことが判明し、二人を佐々の家に、自分の手許に縛りつけておくことができないことがわかると、多計代は伸子に家を出ることを求める。娘を手離さなければならぬ悲しみや絶望感を、誇り高い性格の母親は、罵ることではしか表わすことができない。

伸子のこうした母親に対する感情は、決して反発と敵意だけではない。激しい、類似した性格を持つ二人は、伸子の少女時代から普通の親娘とは違う情熱で結ばれ、互いに強い愛と憎しみをもち続けてきたのである。いよいよ佐々の家を出て独立するにあたり、伸子は母と自分の関係を省みて、母の存在がさまざまな意味でいかに大きかったかを思う。

とにかく、母は伸子に向って、存在のあらゆる角度を、生のまま、強烈に打ちつけて生きて来たのであった。伸子

にとつても、母は全力を要する生存の対照であつた——自分と母との性格の差を自覚し、生活態度を批判し、一言で言えば、彼女の模型でない一女性としての自分を形造つて行くためには、伸子は、生半可の力を費したのではない。普通、娘が母親に抱く懐しき、休安と、正反対の生活燃焼の、異様な閃光が二人の間にあつた。今その門を経て次の生活期に移ろうとする時、伸子の魂を満す、この苦しい、この輝いた、追想の蝟集を、何と母に告げよう。

(104)

母親との確執は、伸子の書いた小説が出版された時に再び表面化し、彼女はさらに母から距離をおかなければならなくなる。小説の主人公の夫に対して主人公の母が反感、敵意に似たものを持っているという個所が多計代の不興を買い、彼女は娘に謝罪を要求する。しかし、伸子も後には引かず、結局、激情に駆られた母から佐々の家に入入りすることを禁じられてしまう。伸子は「異様な寥^{まひ}しさ」を感じ、二、三日不眠が続くが、やがて回復し、「これまでにないさっぱりした気持、軽やかな気持」になる。しかし、そこには「不断の淋しさ」が加わっている。彼女は「自分でしゃんと立つて行こうとする欲望」(136)を強め、次の仕事に着手する。自己を確立し、よりよく生きたいという自己成長願望を遂げるためには、伸子は、自分の「模型」になることを望む母の思惑に屈することなく、強い情愛で結ばれてきた母親から離れて独立していかなければならない。だが、伸子は多計代を否定しきることとはできない。「中流的精神」を持つ母に対する屈折した愛憎の感情は、『『二つの庭』『道標』の中でも描かれている。

伸子が資産家の長女として育ち、アメリカ遊学も経験して、「よい小説が書きたい」という人生の目標も定まった、物質的にも知的にも恵まれた特別な女性として設定されているのに対して、マーサ・クエストは、彼女を主人公とする五連作の『暴力の子供たち』という題名が示すように、二十世紀という激動の時代を生きる、一般的な、ごく普通の女性として描かれている。イギリスから植民地の南アフリカに移住した、経済的に余裕のない農夫の娘、マーサは、伸子とは違って、人生の目標が定まっていはいない。感受性が鈍く、読書好きというだけで、これといった特別な才能

を持たず、女性に対して開かれた職業の少ない時代に生れたマーサ・クエストは、その名が示すように、手探りで自分の生きる道を探していかなければならない。そして、彼女の自分探しの旅の根底には、伸子と同じように、母親とは異なった生を生きたいという願望がある。マーサにとって、母親はその友人で十一人の子持ちのヴァン・レンズバーク夫人と共に、最も理想から遠い女性である。

自分は、ヴァン・レンズバーク夫人のような、太った、現実的で、所帯じみた女性には決してならないつもりだ。母のような、不機嫌で口やかましい、満されない女には決してならないつもりだ。でも、それではどんな女性になるのだろうか。彼女の心は、今まで読んだヒロインに向い、彼女たちを退けた。過去と彼女自身の間にはギャップがあるようだった。そのため、彼女の考えは混乱し、満されずに心の中を浮遊した。⁽⁴⁾

マーサの母親、メイ・クエストは、夫についてイギリスから植民地のアフリカに来て以来、つらい失意の日々を送ってきた。農場経営に失敗し、戦争の思い出話と自分の病気のことしか口にしない病弱な夫との生活では、妻としても満されていない。妻として満されない思いが大きいぶんだけ、子供たちへの関心と期待が増大し、特に娘のマーサには自分の価値観を押しつけ、口うるさく、何かと干渉する。

伸子にとって多計代は、日本の因襲的な家族制度を体現するような存在であるが、マーサにとって母親のメイは、女性や性、人種、政治などに対する植民地白人社会の中心思想を象徴するような存在である。クエスト夫人は、自身の結婚生活が惨めであるにもかかわらず、女の幸福は結婚にあるという考えに固執し、マーサには「結婚するのに相応しい、教養のある娘」(70)であることを求める。

マーサの手探りの自分探しは、こうした母親に対する反抗という形で始まる。物語の冒頭、家の外の石段で本を読んでいる十五歳のマーサは、ユダヤ人のクウン兄弟から借りたバヴロック・エリスの性に関する書物を、故意にペラペラに折る母やヴァン・レンズバーク夫人の目にとまるような位置に置く。彼女は、性や女性に対して保

守的で、型にはまった考え方をする母親たちへの反抗の手段、「自己主張の手段」として使っていることを、自分でも意識する。

マーサが結婚前にユダヤ人の青年アドルフや後に夫となるダグラスとベッドを共にするのも、母親のヴィクトリア時代風の道徳観に対する反発からである。彼女にとって、「好きな時に好きなようにセックスをするというのは、確かにそれ自体が独立の旗、古い世代の顔前で振る、赤い挑戦的な旗」(237)なのである。

人種問題に関しても、クエスト夫人は、きわめて保守的で型にはまった考え方をし、ユダヤ人や黒人に対して強い偏見を持っている。彼女はマーサがユダヤ人のコウン兄弟と親しく付き合うのを好まず、娘がジョース・コウンの紹介で町に仕事を見つけたことに異議を唱える。真珠のブローチを置き忘れれば、黒人の召使いが盗んだと言って解雇し、孫のキャロラインが黒人の庭師と遊ぶことに、強い嫌悪感を示す。マーサが「別の社会に生きていたら、母もまったく違っていただろう」と思うように、クエスト夫人の考え方は、この時代のアフリカ植民地の白人社会においては、ごく普通のものなのである。マーサ自身、「人を人間として見る前に、まずその人の属する集団や国や皮膚の色から見てしまう」(47)ことを恥じながら認めている。

マーサが十五歳の頃から心に描き、一生をかけて探し求める理想都市「四つの門のある町」は、こうした人種的偏見に満ちた母親への反発に由来する。そこでは、「白人、黒人、褐色の膚を持つ人々が同等な者として生活し憎悪も暴力も存在しない」(120)。そして、この黄金の理想都市には、「偏狭なヴィジョンと理解力の乏しさのために」(11)、母親のような俗物は入れないのである。

マーサが自己を模索する過程において、親許を離れ、母親の束縛から解放されることが真の自己確立への第一歩であると言えよう。時折訪れる駅前の商店のユダヤ人兄弟から借りる書物が唯一の知的刺激であるような、農場の草ぶき屋根と泥壁の両親の家での生活は、彼女に悪夢の中に閉じ込められているような感覚を与え、母親はその「悪夢の

中の有害な人物」(24)のように思われる。眼病のために大学を受験せず、外の世界に出る機会を失なったマーサにとって、町の法律事務所の仕事を紹介してくれたジョース・コウンの手紙は、「おとぎ話の王子のキスのように閉塞状態から解放してくれた」(197)ように思われる。伸子がニューヨークで感じたように、十八歳のマーサも、親許を離れて始める都会での新しい生活に、解放感と期待を感じる。

そして、ついにドアは閉じたのだった。ドアの後には農場と農場によって創造された少女がいた。彼女にはもう関係のないことだった。彼女は忘れることができた。

彼女は新しい人間になっていた。そして、驚くべき、素晴らしい生活、まったく新しい生活が始まろうとしていた。

(80)

マーサの自己確立の第一歩は、母親から離れることであるが、彼女の母親に対する感情は、憎悪と反発だけではなく。伸子が多計代に抱いているような強い情愛ではないにしても、マーサは母親に対して断ち切りがたい感情を持っている。クエスト夫人の干渉は、娘が町に出た後も、結婚後も続く。新婚家庭に来て、部屋を勝手に片付ける母親に、マーサは苛立ちを覚えるが、夜着の綻びを繕う荒れた母の手を見て、強い憐憫の情に駆られる。

彼女は座って、夜着を繕う荒れて節くれ立った手を見た。手を見ていると、母を気の毒に思う気持で胸が一杯になった。さらに子供の頃、母がどんなに好きだったか思い出した。彼女は、もはや存在しない女性の白い美しい手を思い浮かべることができた。⁽⁵⁾

人生における唯一の関心事は子供だけで、嫌われながらも執拗に娘に干渉するメイ・クエストにも、ヴィクトリア朝の「家父長的な父親」に反抗し、中産階級の娘が使うのが妥当だと思われるずっと以前に、「自分自身の生活」という言葉を口にした青春時代があったことが、作中何度か述べられている。また、アフリカの夜に、泥壁と草ぶき屋根の家で、シヨパンの夜想曲を涙を流しながらピアノで弾く一面も、彼女は持ち合わせている。「経験によって学ぶ力

を持たない」(364)、自己認識に欠ける世代の女性である母を、マーサは哀れに思い、彼女の境遇に同情も寄せている。しかし、マーサの心の中には、同情と憐憫と共に、自分も母と同じような生を送るのではないか、「階級と世代のこの悪夢、この繰り返し」(147)を生きてのではないかという強い恐怖心がある。彼女は子供を産まないことで、その「円環」を断ち切ろうとさえ思う。マーサの母親に対するこだわりは、母親と同じように結婚して子供を産み、そして離婚した後も、さらにロンドンに移り住んだ後でさえ、『暴力の子供たち』シリーズ全体を通して、途切れながらも続いていく。

マーサが抱く「母親と同じことの繰り返し」を生きることへの不安は、伸子の心の中にもある。悪い評判や周囲の反対を押し切って、彼女が年の離れた「一生、大学の図書館のご厄介になって終る」ような「苦行僧」(20)、佃との結婚に踏み切るのも、因襲にとらわれた生き方に対する反発が根底にある。家柄の良い、立身出世しそうな男と結婚して子供を産み、「世間と調和的」に生きるという従来の結婚に対して、伸子は、「漠然とした重苦しさ、凡庸さ、不安の感」(47)を常に抱いてきた。彼女が理想とする結婚は、仕事の上でも、経済的にも自立した男女が自己成長する場である。そして、佃との結婚でこの理想を実現できるかに見えた。

佃には佃の仕事がある。自分には自分の仕事がある。そして、経済的にも、伸子は彼を稼ぎてとしなければならぬ必要はなかった。彼と生活をともにし、互に扶け合い、一緒にやってゆきたいのは、ただ互の愛をまっすぐ育てられる位置において二人が、より豊富に、広く、雄々しく伸びたいからだけなのであった。(47)

佃は結婚後も伸子を従来の妻の役割に閉じ込めることなく、彼女が自由に仕事をすることを認める。しかし、母との確執の後、佐々の家を出て二人だけで暮らし始めてみて、伸子は、単調に「無表情に廻転」する生活の「幅の狭さ、重さ、若々しい柔軟性の欠乏」(108)に、言いようのない物足りなさを感じる。彼女が心の飢えを感じるのは、二人の生活態度や人生目標があまりにも異なり、精神的交流が得られないためである。その名前が示すように、絶えず伸

び続けたいという欲求の強い伸子に対して、佃は、私立大学に職を得て生活が安定すると、学問的野心も好奇心も失なってしまう。彼は「これまでの精神上の荷物を、どこかにおろしてしまつたように見え」(116)、文学作品はおろか、雑誌さえ一冊以上は目を通そうとしなくなる。日常の会話においても、伸子が面目いと思うことに興味を示さず、彼が好む話題は、勤め先の出来事や同僚の噂話である。

伸子が佃に不満を抱くのは、内向的で社交性のない彼の性格よりも、安定志向の小市民的な彼の生活態度のためであろう。伸子は「中流家庭」の拘束を脱して、「より豊かに、より広く」成長するために、新しい家庭を築いたが、佃との生活の中にも「彼女に辛抱ならぬ中流的な精神や感情の不活発さ」(186)を見い出す。アメリカ生活が長く、疲れた中年男の佃が家庭に求めるのは、安らぎの場であり、「我らが安穩」である。彼の将来の望みは、夫婦で「儉約や貯金や恩給」を楽しみにして、つつがなく一生を終えることなのである。彼の「中流的な精神」は、伸子が別居を申し出た時に、教壇に立つ者が別居などしたら人に顔向けができないと、世間体を気にして頑強に反対することにも見られるだろう。

伸子は『二つの庭』に書かれているように、「人間としてよりよく生きようとしている意志」(323)を持った女性である。「中流的な精神」を持つ佃との生活に、「だんだん自分の心に切ない渣滓が溜って来るのを感じ」(116)、寂しさを訴え、「こうしていいのか」という疑問をぶつけても、佃は「今に馴れます」と言うだけである。知り合いの横田に言うように、佃の妻としての生活に馴れ、向上心と自分らしさを失なっていくことこそ、伸子が最も恐れることである。

「……細君は何だか、生れつき以外に、細君的属性とでも云うものが要求されるみたいね。細工業は、女の適応性を極端に発達させる点で、危険じゃないららう?……『私』というものがなくなつて立ちゆくんだからこわいでし

よう?。」(154—155)

そして、「細君業」に馴れることによって、目の前に拵がってきた道は、「一人の女が人間でなくなるうとする道ではないか」(157) という思いに駆られる。

こうした佃との生活に決着をつけ、離婚に踏み切るきっかけとなるのが、吉見素子との出会いである。近年フェミニズム批評では、女性を主人公とする自己発見、自己成長の小説における他の女性の役割の重要性が指摘されているが、伸子の場合にも、素子との交流が彼女の自己確立に重要な役割を果している。年上の友人で文学上の先輩でもある榎崎佐保子の家で紹介された時、自分の家を持ち、独立して自由にのびのびと生きているロシア文学の翻訳家に、伸子は「純な魅力」を感じる。数日後に彼女の家に訪ねて来てくれた素子と、「寛いだいい心持で」文学について語り合い、佃からは得られない心の交流と知的刺激を得て、「少からず元気づけられた自分を感じ」(221)る。

さらに、佃との生活を見直すために祖母と共に田舎で暮らす伸子は、手紙によって素子との新しい結びつきを深める。彼女は佃とのことやその他自分の思っていることを書き送るが、素子はその一つ一つに意見を述べ、彼女の空虚で沈んだ心に「生氣」を吹き込んでくれる。そして、素子の訪門を告げる手紙が与える「あたたかい悦び」は、夫との五年間の生活でいかにうれしさに飢えていたかを痛感させ、伸子は離婚の決意を固める。さらに、訪ねてきた素子との「いい心持がする」精神的交流は、新たな生活を始める活力を彼女に与える。

伸子はいつの間にか再び自分を貫いて、活発な生活欲が流れだしているのを感じた。自覚しないうちに全身がその流れに領せられたかのようにであった。……新しい生活をしたい、違った暮しを見出したい、そう思いつめ求めている時、それらのものはどこにあるかさえ知れなかった。知らないうちに、時期が来た。ある朝ふと目を醒し、人が俄にしみじみと天地の春を感じるように、気がついて見まわすと、もういつか自分のまわりを流れているのは過去の潮ではない。——そう云う気持が深く伸子を動かした。(232)

仕事のために離婚すると思っっている佃に対して、「私はへぼ小説を書く前に、女に生れて来ているのよ、しかもま

るで女なのに」(237)と云うように、籠の中に収まるのが結婚であると考えている佃との生活では、伸子は女としても満されていない。自然の力がみなぎる田舎での暮らしと素子との精神的交流で本来持っている旺盛な生命力を取り戻した彼女は、はばたき続けたいという願望を胸に、「飼鳥になつては堪らない」(239)と、佃の許から飛び立っていく。『二つの庭』や『道標』で描かれているように、ロシア文学専攻の吉見素子との交流は、伸子をより広い新しい世界へ、ソヴィエト旅行を通しての社会主義思想への目覚へと導いていく。

従来の家中心の結婚制度に反発を感じる伸子には結婚に対する理想があり、佃との結婚も彼女自身の積極的な意志に基づいているのに対して、諦めきつたような両親の不幸な結婚生活を見て育ったマーサは、結婚そのものに否定的である。

どうしてそんなに諦めきつていられるの、と彼女は思い、また、自分自身の将来が不安になったが、将来、あんな風に皮肉っぽくお互いに憐れみ合うことだけで成り立っている結婚は決してすまない、と彼女は決めていた。決して結婚などしない、と彼女は誓った。(61)

進歩的な雑誌『ニュー・ステイツマン』を購読する三十歳の公務員ダグラス・ノーウエルは、遊興にふけるスポーツ・クラブの男たちとは違った、知的で素晴らしい人のように見え、マーサと「同じ仲間」であるように思われる。しかし、彼女はダグラスとベッドを共にした後結婚の約束をするが、翌朝には彼との結婚をまったく望んでいないことを意識する。

マーサがダグラスと結婚した理由の一つとして、年頃の女の子は結婚すべきであるという社会的圧力をあげることが出来るだろう。結婚直後、「何故結婚したのか」という結婚の立ち会いをしてくれたメイナード氏の問いに、彼女は自分の意志とは関係なく、周囲の人々の当然二人は結婚するだろうという期待の中で「つり糸にかかった魚のように引きずられて」(86)結婚してしまったと思う。

また、マーサには、ダグラスと結婚することで満されない現在の生活から脱出できるのではないかという期待もある。農場の生活と母親の束縛を逃れて都会にやって来るが、小さな法律事務所での秘書の仕事とスポーツ・クラブでのダンス・パーティーの日々は、彼女に満足感を与えるものではない。町に来て数週間後には、彼女はすでに退屈し、何か違うものを求めている。周囲から期待される「女の子」の役割を演じながらも、何かもっと重要なことがしたいという欲求に駆られる。十九歳の伸子が家庭環境や才能に恵まれ、人生の目標が定まっているのに対して、同じ年のマーサには、はっきりとした生きる目標がない。新聞記者か作家になりたいという夢はあるが、それは夢でしかない。書いたものを雑誌社に送っても、採用されず、送り返されてくる。ダグラスとの結婚は、そうした町での生活に終止符を止ってくれるように思われた。

結婚は世間のためには通過しなければならぬつまらない因襲的な儀式だと考えているマーサが、結婚式をダグラスと自分を安全にロマンティックな愛の中に囲い入れてくれるドアだとも思っていることは奇妙だった。……彼女は結婚を町での生活に対してしっかりと閉じるドアだと考えていた。町の生活には、すでに何とも言いがたい嫌悪感をいっていた。彼女はいままでの生活が自分とは何の関係もなくなる瞬間を持ち望んでいた。(227—228)

だが、結婚後間もなく、マーサは「この結婚は愚かな間違いであった」(39) ことに気付く。ダグラスと暮らし始めてみて、町で一人暮らしをしていた時よりもかえって「抜け出せないように閉じ込められた」(45) ような気持ちになる。それは、伸子が佃との生活で精神的交流も知的刺激も得られなかったように、マーサもダグラスとの生活では精神的満足感を得られないためであろう。

ダグラスは佃と同じように従来の結婚制度の中では決して悪い夫ではない。公務員としてきちんとして仕事をし、妻が妊娠していることがわかると、父親になることを誇らしく思い、父親の責任として保険に加入する。妻が家事と子育て以外に自分の世界を持つことにも同意している。だが、佃と同じように、ダグラスにとって家庭は安らぎの場であ

り、毎晩妻とくつろぐ時の話題は、職場の噂話である。胃潰瘍で除隊になった後、ダグラスは郊外に大きな家を買うが、そこでの人々の暮らしは、その一員である彼の小市民的な生き方をよく表わしていると言えるだろう。

彼らは四年か五年に一度喜望峰で休暇を過ごし、月に一、二回互いに一日の仕事が終ってから夕方パーティーに招待し合い、週に二、三回ダンスか映画に行った。つまり、彼らは非常に快適で、一瞬の不安もあり得ない生活を送っていた。「安全」が彼らの戸口に書かれた金言で、安全は深く彼らの生活の一部になっていたもので、それについて疑ったり、話し合ったりすることはなかった。彼らの人生のクライマックスは、五十か五十五歳で、その時には、家や庭や家具は自分のものになり、年金や保険が実を結ぶのだった。(349—350)

「中流的精神」の持ち主であるダグラスは、政治集会のような「非合法的なもの」は認めようとせず、マーサーが左翼グループの集會に出席するようになると、世間体を気にし、公務員である自分のキャリアに傷がつくことを恐れて、彼女を非難する。

『伸子』の中で、伸子と佃の生活は、「単調」に、「狭く無表情に廻転」という言葉で表わされているが、マーサーとダグラスの結婚生活は、二人の住むアパートの窓の外に見える遊園地の観覧車によって象徴されている。マーサーは「忌まわしい結婚指輪」のように見える、ゆっくりと回転する輪は、同じことを繰り返す単調な二人の生活を表わすと共に、母から娘へと繰り返す性役割の中のみ生きる女たちの不幸な生の象徴でもある。マーサーは、母親とは異なった生を生きたいと願いながら、母と同じような型にはまった結婚をしてしまった自分を振り返り、五十歳になつたら彼女自身も母のような「心の狭い、保守的で、偏狭で、感受性の鈍い女」(52)になつてしまふのではないかという思いに駆られる。そして、母親と同じような不幸な女の生のサイクルを断ち切るために、彼女は子供を産むまいと決める。しかし、結婚した時点ですでに妊娠しており、さらに性役割の中に閉じ込められることになる。つわりで気分の悪いマーサーの目に、窓の外の「輝く輪のいつまでも続く単調な動きは、恐ろしい、本質的な真実を啓示して

いるように」(142) 思われる。

マーサがダグラスとの結婚生活に不満を抱くのは、従来の女性の性役割にのみ生きることには充足感を得られないからである。夫が出征して留守の間、彼女は子育てに追われる。子供を持てば必ず幸せになれる物語の中の女たちとは違って、完全には満されず考え込むマーサの心に、ある考えが浮ぶ。

こうしたもの憂い自問自答から、あるはっきりした考えが出てきた。それは、このような問題を避ける文学の中には存在しないとしても、世の中には、暖かく許容力のある女らしさと母性と共に、マーサが自分の満足のために漠然と「人間」と呼ぶ本性を兼ね備えた女性がいるにちがいないという考えだった。自分はそのような女性を探さなければならぬのだ。(291)

マーサも伸子と同じように、女も一人の人間としてよりよく生きたいという欲求が強いからこそ、従来の結婚制度の中で、性役割にのみ生きることを不満を感じるのである。伸子が「細工業」で自分らしさが失なわれることを恐れたように、マーサにとっても、「女らしくダグラスの望むことに合わせ従うことは、すべて自分の真の性質に反する偽り」(427) であり、耐えがたいことなのである。

伸子の場合、自由ののびのびと生きているロシア文学の翻訳家素子との出会いが、離婚に踏み切る力を与えるが、マーサにとっては、コミュニスト・グループの活動に参加することが、性役割の中のみ生き、精神的交流の欠如した、充足感のないダグラスとの生活を精算し、新たな出発をはかるきっかけとなる。自分を取り巻く植民地主義思想に反発を感じながら育ったマーサには、人種差別のまったくない「四つの門のある町」を理想郷とするように、常に社会改革の願望があり、ユダヤ人コウン兄弟の影響下に、結婚前も後も、ずっと左翼グループの活動に関心を持ってきた。ダグラスが三週間出張で留守の間に、「同盟国援助団体」の集会に行き、マーサはそこでロシア革命について書かれた本を買う。丁度『道標』の中でソヴィエト旅行が伸子を共産主義に開眼させたように、その本は二十二歳になる

までまったく知らなかった世界に彼女の目を開き、マーサは「生まれてはじめて生きる理想を与えられた」(399) ような気持になる。彼女には、現在自分の住む世界は「醜く、野蛮で、卑しく」、もう一方の世界は「高貴で、創造的で、寛大」に思われ、「新しい世界を作ろうとしている人々の一人に自分もなりたい」(398) という強い衝動に駆られる。

マーサが離婚を決意するのは、ダグラスをはじめ周囲の人々が考えるように、左翼グループの仲間のウィリアムとの恋のためではない。「私は誰かのためにグラスの許を去るわけではありません。……私は違った生き方をするために彼の許を去るのです」(446) と言うように、「素敵な家」「安定した将来」「可愛い小さな娘」まで捨てて、彼女が離婚に踏み切るのは、夫が望む安らぎの場としての家庭では人間としての自己実現の欲求が満されないからである。この時点では、社会主義政治活動に身を投じることによって、彼女は社会改革の夢を実現し、よりよく充実して生きられると考えたのである。また、後に後悔し、何年も罪の意識に悩まされることになるのだが、彼女が幼い娘のキャロラインを夫の許に置いてくるのは、母から娘へと繰り返し返される不幸な女の生のサイクルを断ち切りたいためである。家を出るにあたって、「キャロライン、あなたはまったく自由になるわ。私はあなたを自由にしてあげるのよ」(471) と最後に優しくつぶやくように、マーサは娘を手離すことによって「家庭」から解放してやることができると思ったのである。

マーサはこの時点では、コミュニスト・グループの活動の中に自己実現の場を求め、やがてアフリカの現実から遊離した集団の実体に失望する。彼女の関心は、政治的、社会的変革から心理的変革へと変化し、彼女の自分探しの旅は、このシリーズの最後まで続く。これに対して、『伸子』の続編では、主人公が共産主義思想に開眼し、その中に自己実現の道を見出し出ていく過程が、すでにプロレタリア作家として自己を確立した作者の手により、理想化されて描かれている。

このように「伸子」「マーサ・クエスト」シリーズの他の作品ではその質が異なるが、青春期にある主人公の自己

確立を模索する過程を描いた作品においては、共通する部分が多い。この類似性は、既存の中産階級的価値大系にとらわれることなく主体的な自己を確立したいという主人公の希求から生れるのではないだろうか。主人公は共に、母夫という他者とのかかわりのうちに自己意識を育成しようとする。自分自身満されない思いを内に抱えながらも、娘に既成の制度や価値大系の中にとどまることを求める母親は、彼女たちが自己を模索する過程でモデルにはなりえず、むしろ母親の期待や干渉は、彼女たちの自己展開の桎梏となり、そこから逃れ、独立することが、自己確立の第一歩となる。伸子もマーサも、母親とは異なった生き方を求めて新しい家庭を築くが、「中流的精神」を持つ夫との生活は、彼女たちの自己成長願望を充足させる場にはならない。二人は共に、家庭の「安穩」を捨て、新しい世界に自己実現の場を求めていくのである。

(注)

- (1) ドリス・レスリング自身は、このシリーズの最後の作品である『四つの門のある町』をその後書きの中で「教養小説」と呼んでいる。Doris Lessing, *The Four-Gated City* (New York: The New American Library Inc., 1976) 615. また、水田宗子氏が『伸子』の「教養小説」的側面を指摘している。水田宗子『ヒロインからヒーローへ 女性の自我と表現』(田畑書店 一九八二年) 八九—一〇四頁。
- (2) 宮本百合子『二つの庭』『昭和文学全集第八巻』(小学館 昭和六三年) 三二六頁。本文中のページ数はこのテキストからのものである。
- (3) 宮本百合子『伸子』『宮本百合子集 新潮日本文学21』(新潮社 昭和六〇年) 七八頁。本文中のページ数はこのテキストからのものである。
- (4) Doris Lessing, *Martha Quest* (New York: The New American Library Inc., 1970) 10. 本文中のページ数はこのテキストからのものである。
- (5) Doris Lessing, *A Proper Marriage* (London: Granada Publishing Limited, 1983) 136. 本文中のページ数はこのテキストからのものである。